

『榻鳴曉筆』における漢籍の受容について

―出典明記のあるものを中心に―

小 椋 愛 子

一、はじめに

これまで、『榻鳴曉筆』所収の説話の出典を探り、受容と変容のあり方について考察してきた。『榻鳴曉筆』は約三五〇篇の説話を所収し、その大部分に典拠を有するが、それらが典拠を忠実に引いていること、その中でも仏典は、『法苑珠林』等の類書からではなく、原典から直接引いていることを指摘した。^①『榻鳴曉筆』中に『法苑珠林』の書名の明記があるため、『榻鳴曉筆』編者は『法苑珠林』を見ていたと考えられる。しかし、本文との比較から原典が仏典である場合は、その源に直接依っていたといえる。また、『大唐西域記』や、大乘仏典の本縁部、『菩薩本縁経』や『賢愚経』、『旧雑譬喻経』、『雑譬喻経』等ではその傾向が顕著であることも確認できた。さらに、典拠が日本の書物の場合でも原典重視の傾向が窺えた。^②しかし、『三国伝記』は非常に重要視しており、『三国伝記』に同話がある場合には、『三国伝記』を中心に引く。^③それは、仏典の場合にも当てはまることを指摘した。本稿では、これらのことを踏まえ、漢籍の受容について考察したい。なかでも、今回は、漢籍の出典明記があるものを中心に考察していくこととする。

二、『榻鳴曉筆』中にみえる漢籍について

次に、『榻鳴曉筆』中に書名の見える漢籍について確認したい。典拠として書名を明記する形式としては、説話中に本文として明記する、別記文形式の中で明記する、説話の末尾、もしくは本文中に割り注で明記する三つの形がある。まずは、形式の別は不問として『榻鳴曉筆』に書名の見える主な漢籍を確認する。仏典に関するもの（『法苑珠林』、『冥報記』、『五百問論』等の問答集、寺記等）を除いたものを整理すると、次の通りである。但し、書名の表記は『榻鳴曉筆』の用字にしたがう。

経書、それに準ずるものとして、

『易経』（易繫辞）、『尚書』、『孟子』、『莊子』

正史、史書として

『史記』、『漢書』、『後漢書』、『晋書』、『魏志』、『戦国策』、『魏略』

注釈として

『文選注』、『千字文注』、『韓詩外伝』

漢魏以降に成立したと書として

『帝王世紀』（『帝王記』）、『説苑』、『晋起居注』、『語林』、『鄴中記』、『西京雜記』、『京房易』、『穆天子伝』、『漢武内伝』、『漢武帝故事』、『十洲記』、『述異記』、『竹譜』、『靈鬼志』、『博物志』、『東觀記』、『調玉集』、『弘安国秘記』、『広州先賢伝』、『白居易の詩』（『白氏文集』）、『続述征記』、『周公記』、『紀年』、『甲子記』、『寅成群記』、『雜史抄』、『曲略』、『菟苑榮注』、『榮陽記』、『開中記』、『会稽録』、『笑苑千金』

経書をはじめ、佚書、偽書まで幅広い書名が引かれていることがわかる。しかし、典拠として書名を挙げていても、それに依る分量は、一語、一文から、一話全体と大きく幅がある。今回は、正史を中心に考察したい。なかでも、一話を形成する上でその典拠による箇所の大きいものを中心にみていくこととする。

三、『楊鳴暁筆』における漢籍の受容について

まず、『史記』を典拠とする箇所をみていく。「史記」の書名は全体で数カ所みられるが、なかでも一話の大部分を『史記』に拠る卷十四・第十一「黄石公」を取り上げる。

①『史記』の例として―『楊鳴暁筆』第十四(転変)第十一「黄石公」について

これは、漢に仕えた張良が、黄石公から、太公望の兵書を受ける話である。本文の中に割り注で「史記五十五」と出典を記した後、それに対する後日譚など関連する話を他の書物から引く。しかし、一話の核となるのは、『史記』⁵⁾である。まずは、『史記』との比較を試みたい。割り注にある『史記』の卷五十五は「留侯世家二十五」、留侯張良の話で、張良の家系の説明から始まる。『楊鳴暁筆』の「黄石公」は、張良が、下邳で、一人の老翁(黄石公)と会うところから始まる。『史記』と『楊鳴暁筆』を対照する形でみていく。(以下、前者が『史記』、後者が『楊鳴暁筆』である。)

良乃更三名姓^一、亡匿^二下邳^一。良嘗閒從容步、游^三下邳^{阨上}^二。有^二老父^一。衣^レ褐、至^二良所^一、

昔漢の高祖の臣に長良と云もの、若かりし時、下邳と云所の^一王橋のう^レに^一て一人の老翁の^一かちをきたるにあへり。

『史記』では、これより前に、張良の祖先は韓人で、韓の宰相の家柄であったこと、韓が秦に滅ぼされた時、張良はまだ官職に就く前であったが、私財を投げ出して秦王を討とうとし、失敗したことを述べる。そして秦王から身を隠すため、

姓名を変えて下邳に來たとする。しかし、『榻鳴曉筆』は、その部分を一切取らない。「若かりし時」とするのみで、張良が下邳に來た理由には関心を示さない。また、囲み部分の「圮」を「土橋」と和訳し、同意ではあるが、「一老父」を「一老翁」と表現し、翁の行動、「衣_レ褐、至_二良所_一」を「かちをきたるにあへり」とまとめている。次に、老翁（黄石公）が張良に書を与えるきっかけとなった、老翁が張良を試す箇所を見ていく。

直墮_二其履_下、顧謂_レ良曰、孺子下取_レ履。良愕然欲_レ毆_レ之。爲_二其老_一彊忍、下取_レ履。父曰、履_レ我。良業爲取_レ履、因_レ長跪履_レ之。父以_レ足受、笑而去。

彼翁杳を「土橋のうへ」におとして張良に告て云、「孺子彼杳とりてえさせよ」と云ければ、良、いとびんなき事云翁哉とは思へども、年の高きに憚り、おりて杳をとりさし上たれば、又「我にはかせよ」と云。のぼりて跪きはかせければ、翁足をもてこれをうけて咲て去りぬ。

『史記』が「圮下」に杳を落としたと対し、『榻鳴曉筆』は、「土橋のうへ」に落としたとする。ここは、「うへ」では意が通じにくいのため、『榻鳴曉筆』の誤りか。また、そのように命じられた張良の感情を『史記』では、傍線部分、「愕然欲_レ毆_レ之。爲_二其老_一彊忍」と「驚いて殴りつけようとした」とするが、『榻鳴曉筆』は、「いとびんなき事云翁哉」とする。さらに、杳をはかせるときの張良の心情「業爲取_レ履」は取らず、行動のみを記す。また、「長跪」を「のぼりて跪き」と説明する。これまで仏典では、原典の語を残す形で取るうとする姿勢が見えたのに対し、ここでは、和文化的傾向が見られる。次に、去りゆく翁を見送る張良の様子と、翁が振り返って張良に語りかける箇所を挙げる。

良殊大驚、随目_レ之。父去_二里所_一、復還曰、

良怪しみしたひ行けば、一里ばかりして翁立帰り告て云、

傍線部分、『榻鳴曉筆』では、「怪しみしたひ」と『史記』よりも細やかに張良の心の内を記し、「里所」を「一二里」と概数にして、状況をわかりやすくする。但し、『史記』では、翁の言葉を聞き終えた張良の様子と行動を「良因怪_レ之、跪

曰、諾。」とするため、『榻鳴曉筆』が『史記』の先の箇所までをまとめたとも考えられる。この時の翁の言は、次のようである。

孺子可レ教矣。後五日平明、與レ我會レ此。

孺子に教べき事あり。今より五日といはん午時にこゝに来るべし。杳とりたりし悦びいはん

『榻鳴曉筆』では、後の展開を重視するためか、「午時」と時刻を明確にする。さらに、『史記』にはない傍線部分を付加し、何か良いことが起こることを予想させる。五日後に張良が行くと、先に翁が来ており、張良は遅れたことを叱られる。その場面、

怒曰、與_二老人_一期、後何也。去。曰、後五日早會。

翁前より有て怒て云、「かく年老たる者と契りを結びながら、遅き事はいとあやし。後五日して来るべし」

も、傍線部分、『榻鳴曉筆』は、意をとりながら、和文化的し、老翁の心情を理解しやすくする。さらにこの五日後も張良は遅れ、再度五日後の来訪を指示される。三回目にして、ようやく張良が翁より先に到着することになる。張良は、一回目から三回目まで順に出発する時刻を早めていく。『史記』では、先に見た囲みのように、指示されたのは、「平明」であったため、一回目は「平明」に、二回目は「雞鳴」に、三回目は「夜未_レ半往」に出かけたとする。『榻鳴曉筆』は、翁が「午時」を指示するため、一回目は「午時」に、二回目は「まだ暗きより」、三回目は「まだ夜半」から出かけたとする。『榻鳴曉筆』は、意を強調するため、『史記』の表現を変えていることがわかる。続いて三回目で張良の先の到着を翁が喜び、書を与える箇所で、『史記』は、「喜曰、當_レ如_レ是。出_二編書_一曰」とするのみである。しかし、『榻鳴曉筆』では「暫_二あて翁来り、気色よげにて『かくこそ』とて懐より『巻の書』を取出しさ、げけり。」と傍線部分のように、翁の様子を詳しくし、さらに「一編」を「一卷」とする。些細な違いであるが、仏典等で原典の語を重視した傾向を鑑みると、撰取の仕方が異なるといえる。この後、『史記』と『榻鳴曉筆』では、話の順序が異なる。『史記』では翁が、この書を読めば王者の

師となれること、十年たてば興隆し、十三年後にまた自分に会うこと、自分は穀城山の黄石であることを話し、その後、張良が「平旦」になつてからその書をみると、太公望の兵法であつたとする。『榻鳴暁筆』では、その書の説明を先にする。さらに、順序のみでなく、その内容にも違いがみられる。例えば、書の説明として、『史記』では「乃太公兵法也」とするだけなのに対し、『榻鳴暁筆』では、「此書は大公の兵法として、周の時の軍のたばかりの様を大公望が記せし文也。又は軍のうらふみ也共いへり。」と詳しくする。また、翁の話す内容は『榻鳴暁筆』も同じであるが、『史記』の「後十年興」を「後十年に此書弘べし」と表現する。『史記』ではこの後「良因異レ之、常習誦レ讀之。」とし、十年後に張良が沛公と出会うまでの様子、沛公と出会つた後の活躍を具体的に記述する。『榻鳴暁筆』は、「良これを悦て後劉季にしたがひ、此文を開て教へけり。さて良をば廐將と云官人になされけり。さてこそ高祖「運籌策帷帳中、決勝千里外、張良之功也」とはの給ひけれ。」とまとめる。この箇所は、『史記』の「沛公拜レ良爲廐將」。良數以三太公兵法二説三沛公。」、「良未嘗有三戰鬪功」。高帝曰、運籌策帷帳中、決勝千里外、子房功也。自擇三齊三萬戸。」から取つていふと考えられる。しかし、『史記』では、この二つの箇所間にさまざまなエピソードがあり、以後も張良の話は続く。『榻鳴暁筆』は、それらを一切記さない。

以上のことから、『榻鳴暁筆』は『史記』の意を取りながらも、表現を変え、さらに理解しやすくするため、原典にない部分を付加しているといえる。これまで、仏典では、原典の表現をできる限り用いること、『三國伝記』から取る場合には、ほぼ原文を取り、表現が一致していたことを考えると、このような傾向は、それらとは趣を異にする。この箇所は、『史記』に直接よるとは考えにくい。

『榻鳴暁筆』は、ここまでを「史記五十五」と出典を記した後、続けて、「匡房か、れたり」と「匡房」の言を引き、この書の行方を記す。但し、この箇所は『江談抄』には見えない。さらに、続けて、黄石が書のみでなく、不死の薬や仙術をも張良に教えたとの説を「又弘安國秘記には」として挙げる。『史記』、「匡房」の言、『弘安國秘記』の説の挙げ方、引

書の並びは、『榻嶋暁筆』編者が選別したというよりも、何か典拠があると思われる。そこで、注釈書類を調べてみると、『和漢朗詠集永濟注』⁶（以下、『永濟注』とする）の467「漢高三尺之劔坐製諸侯一 張良一卷之書立登^二師傳^一 後漢書」の注と内容、引書の並びが一致する。『永濟注』では、下の句の注として、「史記五十五」、「匡房」、「孔安国秘記」を挙げると、本文を比較すると『史記』と異なる部分と一致することがわかる。『榻嶋暁筆』と『永濟注』を対照する形で挙げる。（以下、前者が『榻嶋暁筆』、後者が『永濟注』である。）冒頭部分、

若かりし時、下邳と云所の土橋のうへにて一人の老翁のかちをきたるにあへり。

ワカ、リシトキ、下邳トイフトコロノ、ツチハシノウヘニアソヒキ。トキニ、ヒトリノ老翁ノ、カチヲキタルカ……では、『史記』と異なる表現であった傍線部分が一致する。さらに、翁が張良を試す箇所も

彼翁沓を土橋のうへにおとして張良に告て云、「孺子彼沓とりてえさせよ」と云ければ、良、いとびんなき事云翁哉とは思へども、年の高きに懼り、おりて沓をとりさし上たれば、又「我にはかせよ」と云。のぼりて跪きはかせければ、クツラ、ツチハシノシモ^{シモ}ニヲトシテ、張良ニツケテイワク、孺子、カノクツトリテ、エサセヨ、トイヒケレハ、良、イト、ヒムナキコトイフ、オキナ、リトオモヒテ、ウタムトオモヘト、年ノタカキニ、ハ、カリテ、オリテ、クツラトリテ、サシアケタレハ、ワレニハカセヨトイヘハ、ノホリテ、ヒサマツキテ、ハカセケリ。

と、波線部の「うへ」と「シモ」は異なるが、「土橋」の表現、他の『史記』にない張良の心情（傍線部分）は一致する。また、傍線箇所以外でも重なる表現が多い。張良が翁を見送る箇所も

良怪しみしたひ行けば、二里ばかりして翁立帰り告て云、

良、アヤシミテ、シタカヒユケハ、二里ハカリユキテ、タチカヘリ、ツケテイハク、

と、ほぼ同文で、「二里」の概数も一致する。また、その時の翁の言、

沓とりたりし悦びいはん

クツトレリシ、ヨロコヒイハム

も、さらに、張良が遅れてしかられる一回目の言、

かく年老たる者と契りを結びながら、遅き事はいとあやし。

カク、トシヲヒタルモノト、チキリラムスヒナカラ、ヲソキコト、イトアヤシ。

も、ほぼ同文である。さらに張良が出かける時間を『永済注』では、「平旦」、「マタ、クラキニ」、「マタ、ヨナカ」^⑦としており、『榻嶋暁筆』の「午時」、「まだ暗きより」、「まだ夜半」と類似する。また、三回目^⑦に喜ぶ翁の様子とその言も

気色よげにて「かくこそ」とて懐より一巻の書を取り出し、げけり。此書は大公^{マヤ}の兵法とて、周の時の軍のたばかりの様を大公望^{マヤ}が記せし文也。又は軍のうらふみ也共いへり。

ケシキヨクテ、カクコソトイヒテ、フトコロヨリ、一巻ノ書ヲトリイテ、サツケ、リ。ソノフミヲハ、太公カ兵法トイヒテ、周ノ時ノ、イクサノ、タハカリノヤウヲ、太公望カ記セル書ナリ。

と、書を「一巻」表現すること、書の説明、さらにその順序も近似する。その後の翁の言で、『史記』と異なった「後十年に此書弘べし」（『榻嶋暁筆』）も「後十年ニ、コノフミ、ヒロマルヘシ。」（『永済注』）と一致する。張良のその後も『永済注』に「後ニ、劉季ニ、シタカヒテ、コノフミヲトキテ、イクサノコトヲ、シヘケリ。高祖、良ヲシテ、廢將トイフツカサニ、ナサレニケリ。高祖ノタマハク、ハカリコトヲ帷帳ノウチニメクラシ、勝ツコトヲ千里ノホカニ決スルコトハ、良カ功ナリトノタマヒケリ。」とあり、『榻嶋暁筆』とほぼ同文である。「匡房」の言とするところも、

良を後には大臣になされけり。張丞相と云これ也。件書異朝にありし時、殊にたゝりをなしければ、良が子孫彼書を所持し日本に來り、故資綱大納言の家人となる。故に、資綱又家賢卿に伝て其後院へ進覽と云々。匡房か、れたり。

匡房云……件書ハ、唐朝ニアルトコロ、コトニ、タ、リヲナシケレハ、張良カ子孫、ヲハレテ、日本ノ人ニツキテ、此朝ニ來也。而、件書ヲハ令進院云々。件男ハ、故資綱ノ中納言ノ家人也。仍、書ヲ資綱ニツタヘテ、家賢ノ卿ニ伝

フ。家賢卿、進院云々。

と『榻嶋暁筆』の記述と重なる。さらに『弘安国秘記』の記述も

又弘安国秘記には、長良逢黄石公、一卷の書を伝たるのみにあらず、不死の薬をもえたりと。故に仙道を習、神通自在なり云々。

又、弘安国秘記ニハ、張良得黄石公不死之法、不但兵書而已トイヘリ。又、張良、本ト漢ノ四皓ヲ師トシテ、仙道ヲ習ヒテ、神方ヲヘタリ。

とあり、内容を同じくする。『孔安国秘記』とは、「孔安国」の書いた書と思われるが、現在は佚書であり、確認できない。『榻嶋暁筆』では、書名を「弘」と誤る。これは、「孔安国」という人物を『榻嶋暁筆』編者がよく知らなかったといえよう。

以上のことから、『榻嶋暁筆』の表現は『史記』よりも『永済注』に重なるところが多いといえる。『永済注』の成立時期を、『和漢朗詠集古注釈集成』第三巻の解題では、「永済注」という呼称が、「すでに文安五（一四四八）年の『太子伝玉林抄』に見られる」こと、また、その内容が、『源平盛衰記』、身延本『平氏伝雜勘文』、さらに、鎌倉中後期書写の『和漢朗詠註抄』等に引用されている」こと、釈永済が、「鎌倉前期頃の多武峰に活躍した住僧らし」いことから、「鎌倉初期頃と推定」している。『榻嶋暁筆』の成立時期は確定していないが、鎌倉後期から室町であることを鑑みれば、この箇所は『榻嶋暁筆』が『永済注』を参考にしたといえよう。

いずれにしても、この話は「史記五十五」と記しながらも、その原典から直接取るのではなく、『永済注』と関わり、間接的に取っていると見える。次に『漢書』を典拠とする一例を挙げる。

②『漢書』の例として―『楊賜曉筆』卷十(似類)第十「蘓武雁札」について

これは、漢の名臣として有名な蘇武の話である。漢の使として匈奴に赴き、そこに抑留された蘇武が、雁(鴈)に手紙を結びつけて自分の現状を知らせたという故事が有名である。本話もその部分を「漢書心也」と、『漢書』から取ったとし、続けて話の解釈を行う。まずは、『漢書』に拠る箇所から見ていきたい。これは、『漢書』卷五十四「李廣蘇建傳第二十四」(蘇武伝)に拠ると考えられる。しかし、比較すると、蘇武の設定から異なる。『漢書』では、漢と匈奴は緊張関係が続き、お互いに使者を留め置く処置を取っていたが、天漢元年に且鞮侯单于が即位すると、单于が漢(武帝)の攻撃を恐れて、使者達を解放し、漢に還らせる。そのため、「武帝嘉其義」、乃遣下武以中郎將一使持節送匈奴使留在漢者上、因厚輅(賂)三单于一、答其善意。」と、武帝がその善意に応える形で「蘇武」を遣わしたとする。さらに、蘇武が匈奴に赴いたときは「會三緱王與三長水康常等一謀反匈奴中……」と、緱王と康常らが、单于の母方の氏である閼氏を漢に投降させようと画策しているときで、使節の副使と康常が親しかつたため、蘇武も巻き込まれ、匈奴に抑留されたとする。それに対し、『楊賜曉筆』は蘇武を武將とする。「漢武帝の御宇に、李陵を大將軍として蘇武を副將軍として五十万騎をさしつかはし、胡国の匈奴单于といふを責られしに、漢の軍よはふして蘇武いけどりにせられてけり。」と、蘇武が李陵の下で戦い敗れて、匈奴に降つたとしている。李陵と蘇武は同じ時期に匈奴と関わるが、『漢書』等に通じていけば、著名な二人の混同はないと思われる。『漢書』は、蘇武の父である蘇建については「蘇建、杜陵人也。以三校尉一從二大將軍青一擊三匈奴一、封三平陵侯。」と、匈奴を討ち、平陵侯となったことを述べるが、蘇武が副將軍として戦つた記述はみられない。『楊賜曉筆』が、『漢書』を直接見ているとは言い難い。

これも『永洛注』の502「賓鴈繫書秋葉落 牡羊期乳歲花空 蘇武 左昌」の注に同様の記述が見られる。該当箇所を挙げる。

蘇武、字子卿、前漢ノ人ナリ。漢ノ武帝ノトキ、李陵ヲモテ大將軍トシ、蘇武ヲモテ副將軍トシテ、北ノカタ

凶奴トイフエヒスヲ、ウチニツカハセリケルニ、ミカタノイクサヤフレテ、蘇武、凶奴ニトラハラレニケリ。

傍線部、特に囲みの箇所が一致する。さらに、対照する形で比較していく。(前者が『榻嶋暁筆』、後者が『永濟注』である。)その後、単子が捕らえた蘇武を上相とし、娘の公主と結婚させようとするのを、蘇武が拒む場面では、『永濟注』の表現を用いて簡略化しながらも、蘇武の言まで

武云、「妻をさづけて相とするは不仁にあたり。身をまかせて死をうくるは忠臣たらん」とぞいひける。

武カイハク、妻ヲアタヘテ相トスルコトハリ、不仁ニアタレリ。身ヲマカセテ死ヲウク、願ハ忠臣タラム、トソイヒケル。

と、一致する。さらに武が北海に遣わされて、そこで羊を飼い、鴈が来る箇所では、

其時武を北海の辺に遣し、羊をかわせければ、武天に仰ぎて歎云、「北來の鴈、南往の鳥、定て我古郷をすぐらん物を」と云ければ、天其心を哀て、二の鴈を石上におとせりければ、

又、武ヲシテ、北海ノホトリニ、ヒツシヲカハセケレハ、武、天ニアフキテ、ナケキテイハク、北來之鴈、南往之鳥、我カ故郷ヲスクラムトイヒケレハ、天、ソノ心ヲアハレミテ、二ノカリヲ、石穴ニヲトセリケレハ、

と、傍線部の「石上」と「石穴」の違いはあるが、他は細かな表現まで重なる。その鴈に手紙を託すのであるが、『榻嶋暁筆』はその手紙の内容を「昔籠岩窟洞、送三春愁歎、今捨曠田畦、成胡狄一足、設散骸胡地、魂再仕君辺」とする。しかし、『永濟注』では、末尾の二句があるのみであり、さらにその二句もこの箇所ではなく、末尾の異説に記載される。また、この詩は『漢書』にも記述がない^⑩。この後は、武帝が書を見て対応する箇所、

……さて帝、蘓武はいまだ死なざりけりとて、さらに廿人の御使をつかはし、千金をもてあがなひ給ふ。其使いまだ行つかざるに武は帰りまいりにけり。漢書心也。

……武ハ、イマタシナサリケリトテ、サラニ廿人ノ御ツカヒヲツカハシテ、コカネヲモテ、マカヒタマフ。ソノツカ

ヒ、イマタクキツカサルニ、武カヘリマイリニケリ。漢書二見エタリ。

まで、波線部の違いはあるが、表現は極めて近い。『榻嶋晝筆』は、詩を付加したため、漢書の「心」としたか。また、この後、『榻嶋晝筆』は「或文云……」、「又説苑には……」として異説を挙げる。『説苑』の箇所は冒頭から、

又説苑には、武匈奴にしたがはざりければ、单于劍を抜て「汝した¹³がはずんば命をたゝん」とぞ云ける。其時武、「我忝くも漢王の御使也。争か戎の類に屈せられんや」とて、みづから劍にさゝれんとしければ、单于大におどろきやみにけり。

説苑トイフ文ニイヘルハ、匈奴ノ主、单于、武ヲシタカヘムトシケルニ、シタカハサリケレハ、ツルキヲモテ、シタカハスハ、イノチヲタ、ムトイヒケレハ、ワレハ、カタシケナクモ漢王ノ御使也。イカテカ、エヒスノタクヒニハ、屈セムトテ、ツルキヲヌキテ、ミツカラサシタリケレハ、单于オホキニヲトロキテ、クスシラメシテ、ツクロハセケリ。

と、波線部の相違はあるが、全て意は同じであり、且つ、表現も近似する。この後、末尾まで内容を同じくする。さらに『榻嶋晝筆』は、「此両説相違せり。」として『漢書』と『説苑』の違いを評する。

漢書の意はまさしく書をつくり鷹に付たりと見へ、説苑の意は李陵がはかり事にいへる、鷹札実ならず。

今案、漢書ノ心ハ、武マサシク書ヲツクリテ、カリニツケタリ。説苑ノ意ハ、李陵カハカリコトニテ、鷹札実ニアラス。

ここも、表現、内容が重なる。さらに、続けて『榻嶋晝筆』は「古人説云」として、雁札は何をもつて書き記したのかとの都良香と題者との問答を挙げる。その問答も『永濟注』に「古人説云」としてあり、構成や内容が一致する。はじめから末尾の箇所、

其時香云、「六一自人、女某其媒なりと云て、又云事もなかりければ、題者、意を得て、申さんなれとて、やみにけり。

意は立身媒と云文の名を云ける也。彼文に云、^マ一割レ裘為レ紙、嚙レ指為レ筆、以レ血為レ墨書也。接持鴈^ラ其足結繫^ニ此書^ニ云々。

香カイワク、六一自人女某其媒ナリトイヒテ、又イフコトモナカリケレハ、題者、コ、ロヲエテ、マウシタナリトテ、ヤミニケリ。意ハ、立身媒トイフ、ミノ名ライヒケル也。立身媒云、割裘^ニ為紙^ニ、嚙指^ニ為筆^ニ、以血^ニ為墨^ニ、書^ニ付鴈^ニ、其足結繫此書^ニ、文云、設散骸於胡地^ニ、魂再仕君辺^ニ云々。

まで、内容、表現ともに近似する。二重傍線部は『榻鳴曉筆』のこの箇所には見られないが、先にあげた『榻鳴曉筆』が附加した詩の末尾の二句と表現が一致する。

以上のことから『榻鳴曉筆』に漢籍の書名が明記されていても、直接の関係は薄いことがわかる。注釈等から間接的に引いているといえよう。さらに、この後、『永濟注』は、「又、鴈札ノ本文、内典ノ中ニアリ。」として、「月蓋王ノ太子」である「善友太子」の母が、鴈の首に書を付け、諸国をさまよっていた「善友太子」に手紙を届けたとの説話を挙げる。そしてそれを「報恩経第四卷、并、賢愚経第二卷ニアリ。」と記す。しかし、『榻鳴曉筆』はその箇所を取らない。このことも、注目すべきことである。この仏典の説話は『大方便佛報恩経』卷四「悪友品第六」、『賢愚経』卷九の「善事太子入海品第三十七」を指すと思われるが、両者の内容に相違があり、さらに『賢愚経』の巻が異なる。『榻鳴曉筆』編者は、仏典に関する知識があつたため、両者をまとめて論じることや巻の違いに疑問を抱き、さらにこの説話と蘇武の話の関連性は薄いと判断したため、取らなかつたと考えられる。

『榻鳴曉筆』は、注釈類を参考にしていると考えられるが、先にも述べたとおり、『榻鳴曉筆』編者に漢籍の詳しい知識があつたならば、蘇武を副將軍するとは思われない。李陵と蘇武とが匈奴で会うことから、前からの縁を関連づけるため、そのようにしたとも考えられるが、仏典等での原典に忠実な姿勢を鑑みると、やはり、注釈書等から引いても、原典に精通していれば、異を唱えるなど、何か言及したのであろう。『榻鳴曉筆』の編者自身、誤りに気づいていないと思われ⁽¹⁴⁾。

四、まとめ

以上、『榻嶋暁筆』が、『史記』、『漢書』と出典明記をしながらも、その原典に直接よるのではなく、『永済注』と関わり、間接的に引いていることを確認した。また、その場合、内容だけでなく、一話の構成や、異説の挙げ方、その総合的な解釈をも、『永済注』と関わっていることを確認した。これは、漢籍の引用の仕方が、仏典（とりわけ、『大唐西域記』や『譬喻経』、『賢愚経』など大藏経の「本縁部」）の撰取の方法¹¹（原典を直接見ていると考えられること、表現を極力変えずに、原典に忠実であること、類書等に同話がある場合でも、本文の比較から、直接原典をみていると考えられること）と、全く異なっていることを意味する。

さらに、『漢書』の例で見たように、明らかに誤りなもの、原典にないものでも、『永済注』に拠ってその内容を引いていることから、『榻嶋暁筆』の編者が、その誤りに気づいていないと考えられる。このことは、仏典に比べて、漢籍には精通していなかったからともいえよう。

本稿では、「正史」を中心に考察したが、他の書でも『永済注』との関わりがみられる。『榻嶋暁筆』が注釈書と関わること、仏典と漢籍で撰取の方法に違いが見られることは、重要な意味を持つと思われる。今後の課題としたい。

注

(1) 拙稿『『榻嶋暁筆』卷二十三「四獸与食道人」,「三獸与食老夫」をめぐって』(『愛知淑徳大学論集』第三十五号・二〇一〇年三月)

拙稿「循環する物語―『榻嶋暁筆』卷二十三「鼠物語」を巡って―」(『愛知淑徳大学論集』第三十二号・二〇〇七年三月)

- (2) 拙稿「榻鳴晚筆」の世界津―〈別記〉の形式をめぐって―(『愛知淑徳大学国語国文』第二五号・二〇〇二年三月)
- (3) 拙稿「榻鳴晚筆」における「三国伝記」の位置(『愛知淑徳大学国語国文』第二十七号・二〇〇四年三月)
- (4) 引用は、市古貞次校注『榻鳴晚筆』(中世の文学・三弥井書店・一九九二年一月初版第一刷発行)による。
- (5) 引用は『史記』中華書局による。また、私に訓点を施した。
- (6) 引用は『和漢朗詠集古注釈集成』第三卷 伊藤正義・黒田彰編著(大学堂書店・一九八九年一月第一刷発行)による。
- (7) 高田本、京大本「夜半」(注6による)。「和漢朗詠集古注釈集成」第三卷「永濟注」の底本は永青文庫本)
- (8) 『榻鳴晚筆』は、題では「雁」の字を用いるが、説話本文では「鴈」を用いている。
- (9) 引用は『漢書』中華書局による。また、私に訓点を施した。
- (10) 宮内庁書陵部本、東京大学国文学研究室本は「穴」とする。(底本は、国会図書館本)(注4による)
- (11) 『平家物語』卷二「蘇武」等に類似する詩がある。これに関しては、別の機会に論じたい。
- (12) 高田本「アカハセ」、京大本「あかひ」(注6による)
- (13) 宮内庁書陵部本、東京大学国文学研究室本は「ずは」とする。(注4による)
- (14) これに関して『晋書』の例を挙げる。『榻鳴晚筆』卷十八・第十一「琴起」には、春秋時代の晋の平公に仕えた楽人「師曠」の話があるが、この出典を『晋書』とする。これは、明らかに時代が異なり、『晋書』に同様の話は見えない。『榻鳴晚筆』編者は、『晋書』の魏晋南北朝の「晋」と周代の「晋」を混同していたと考えられる。また、この箇所は『和漢朗詠集和談鈔』に同様の記述があり、『永濟注』にも類似の記事がある。『榻鳴晚筆』は、これらによると思われる。この問題に関しては、別の機会に論じたい。

(全学日本語教育部門非常勤講師)